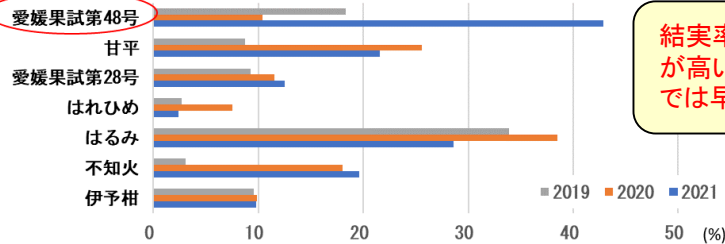


‘愛媛果試第48号’の着果管理

3 L以上の大玉果はス上がりが発生しやすいため、**目標階級はL~2L、最終葉果比80~100**とすることで連年生産可能。
ヘソ・ネックの発生が多いため、外観を見極めながら摘果を行う。

摘果のポイント

- 結実性は比較的良好いため、着花過多樹では再せん定で花数を減らすとともに、群状着果部を中心に満開40日後からの早期摘果で着果負担を軽減する。
- 単生有葉花主体の樹勢良好な樹では、生理落果が終息する満開60日後からの摘果とし、3L以上の大玉果はス上がりが発生しやすいため、目標階級L~2L（ネーブル規格）とした着果管理とする。



結実率ははるみより劣る傾向、着花過多樹では早期摘果が必要。

図 愛媛果試第48号の結実率と他品種との比較



ヘソ・ネックが発生しやすいので、程度のひどいものから優先的に摘果する。新梢の発生が多い樹勢良好な樹では、早期に強めの摘果を行うと3L以上の大玉果の割合が高まる恐れがあるため、大玉生産が必要な品種（愛媛果試第28号や不知火等）の粗摘果を先に済ませ、その後に本品種を摘果することで、労力分散も可能。

葉果比と果実肥大(雨よけ施設栽培の事例)

表 最終葉果比の違いによる階級割合と翌年の着花量(R3年産)

試験区	階級割合(%)					翌年の着花量
	4L	3L	2L	L	M	
葉果比100	4.4	40.0	49.3	5.7	0.6	2.4
葉果比80	4.5	41.6	46.1	7.0	0.8	2.4

注) 雨よけ施設栽培、両区とも6/29に葉果比55程度に粗摘果、9/3に試験区ごとに仕上げ摘果

適正葉果比は、樹勢・園地条件によって調整が必要だが、最終葉果比80~100とすることで連年生産可能と考えられる。なお、愛媛果試第48号は樹勢が強く秋芽が発生しやすいため、9~10月の水・枝梢管理には注意が必要。

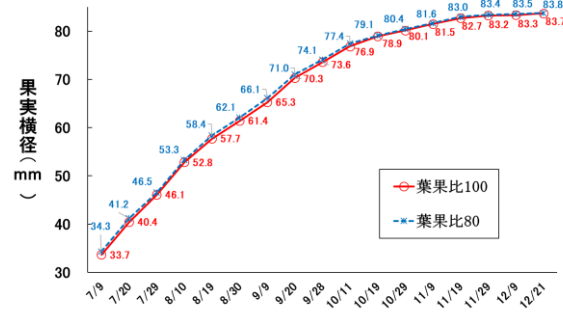


図 果実横径の変化



高接4年生
【葉果比80区・13個/m³】

果実肥大は10月上旬まで旺盛だが、その後緩慢となる。浮皮の発生はみられない。収穫時期が遅いため、施設栽培では2次肥大の恐れがある。冬季でも日中高温とならないよう温度管理に注意する。

樹冠拡大時は、主枝先端を摘果。樹勢が良いため、その後は全面間引き摘果で問題ないと考えられる。